外国人集住都市会議うえだ2019

多言語環境で育つ子どもの家庭言語の重要性
ー海外の実践を踏まえてー

中島　和子
トロント大学

2019.12.26　13:00-17:30
上田東急REIホテル

© Kazuko Nakajima 2019

今日のテーマ

- 「子ども」とは「言語形成期」の幼児・児童・生徒のこと
- 言語形成期の子どもは**特殊な言語習得力**を持っている

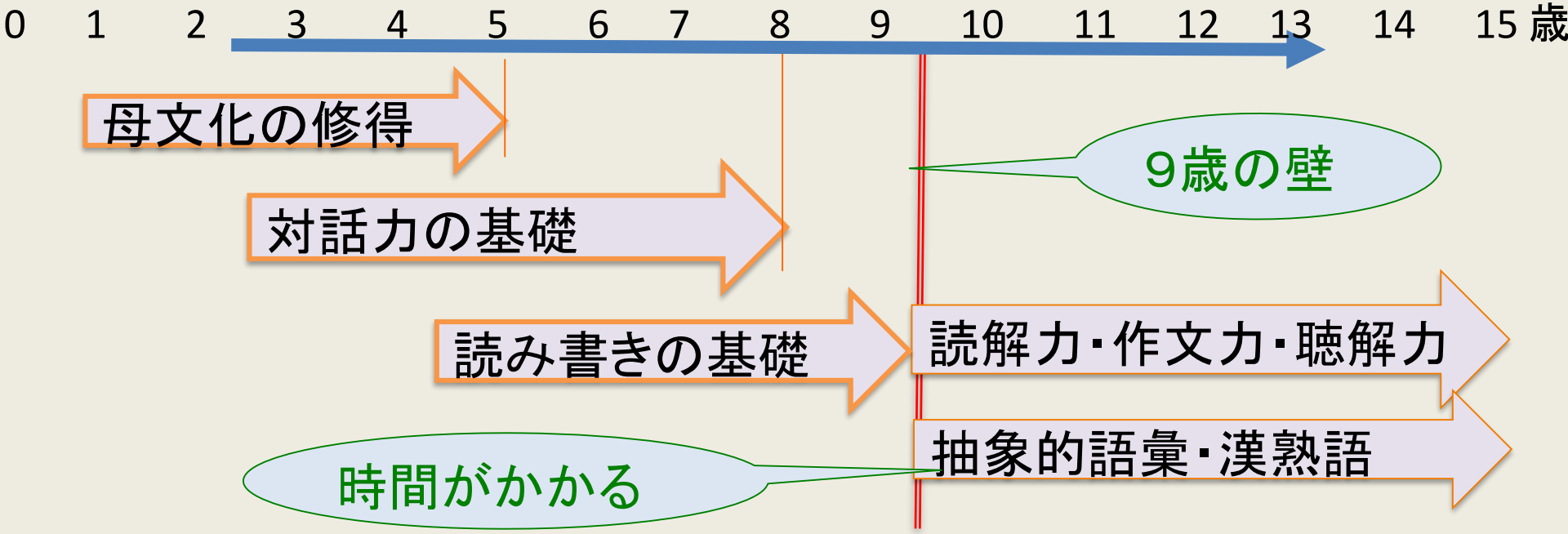
- 多文化共生だけでなく、多言語共生を目指すべき
- 年少者日本語教育の４種類
- 継承語と日本語は車の両輪であること

- カナダのオンタリオ州の国際語/継承語教育
- ユニークな日本の外務省・文科省支援の補習授業校
- 李多園さんの事例から学ぶ

- 教科学習と統合した日本語学習
- 多言語育成の観点からの指導アプローチ

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

言語形成期(柴田1956)の言語能力の習得



言語を自然に習得する力を持っているのは
言語形成期の子どもだけ

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

多言語育成はプラスかマイナスか

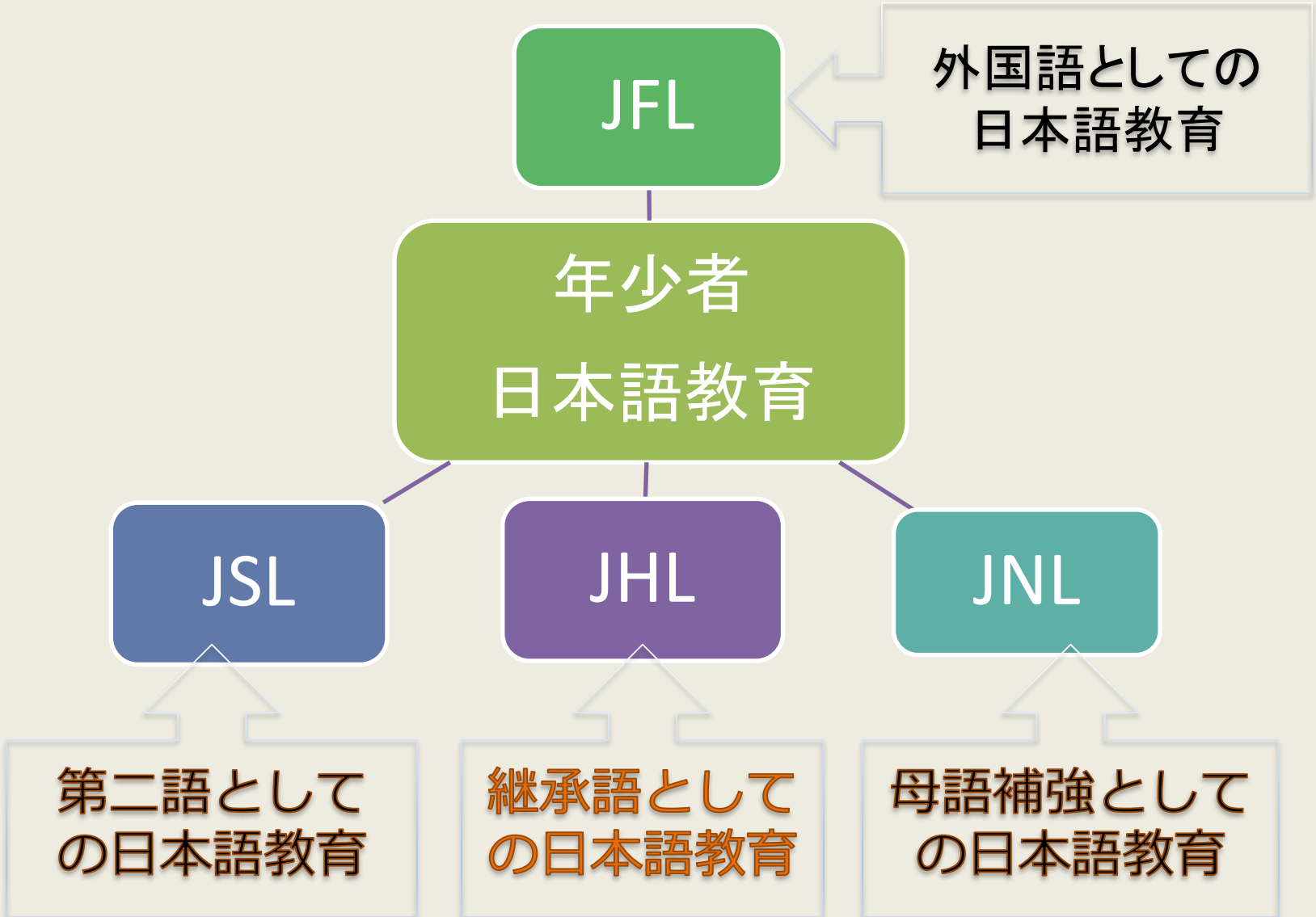
- 1960年半ばまでは、マイナス
  - 学業不振
  - 精神錯乱
  - 情緒不安定

- その後はプラス
  - 知的発達を刺激
  - 思考の柔軟性
  - 創造力を高める
  - 言語感覚が鋭い
  - 異文化理解を深める
  - 第２/第３言語の習得に役立つ

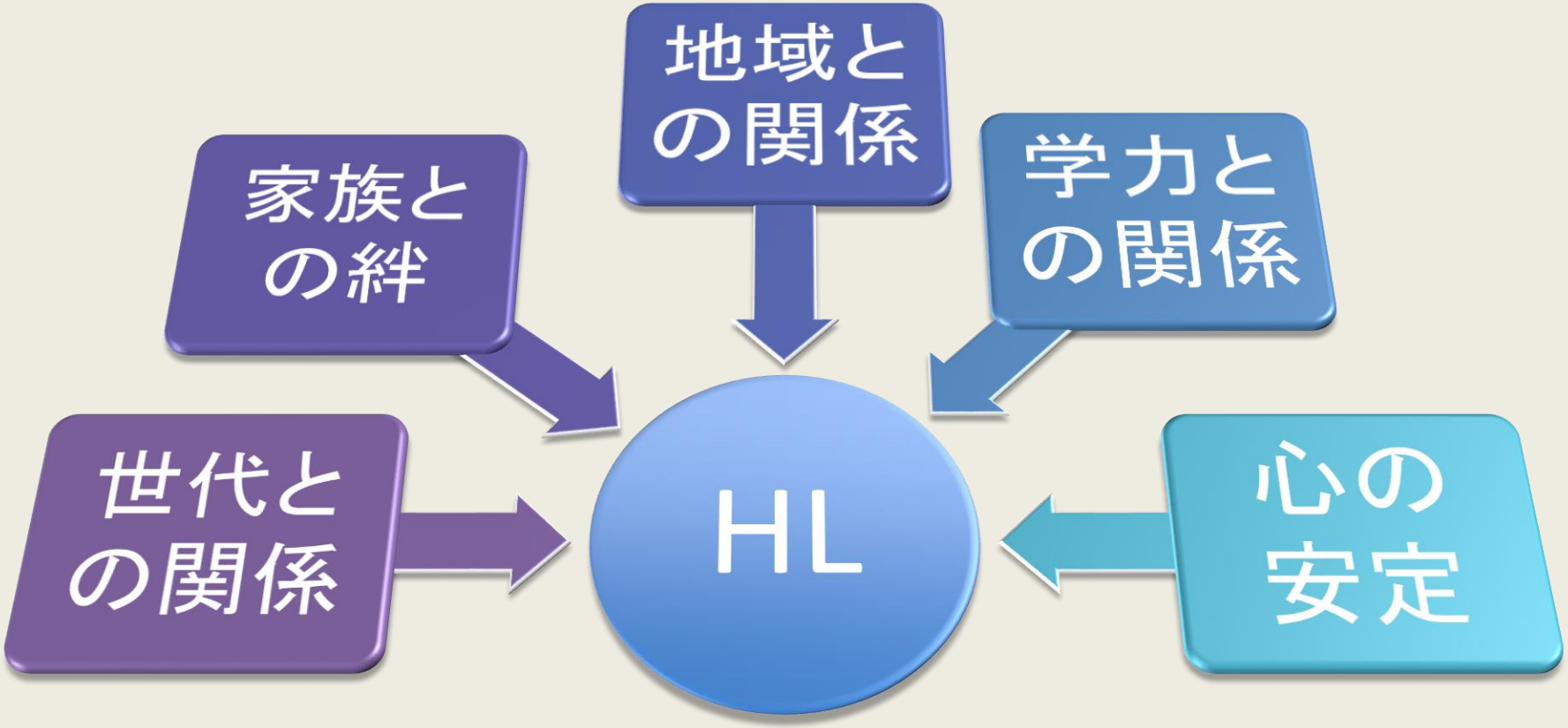
図２　２言語の到達度による分類（カミンズ）（中島 2016:7）

（Cummins, 1985: 10 をもとに作成したもの。筆者訳）
イラスト：川手文子

年少者の日本語教育 ４ 種類



継承語教育 (HL) の主な特徴



ⓒ Kazuko Nakajima 2019

家庭言語とは？

- 両親が外国生まれ・外国育ちの場合

  子どもも親の母語（子どもにとっての継承語）

  両親は自分の母語 ⟷ 子どもは学校言語

- 片親が外国生まれ・外国育ちの場合 ⟷

  子どもは父とは父語、母とは母語

- 両親が二世以降の場合 ⟷ 親も子どもも学校言語

「母語は就学初期に失われやすい」（カミンズ, 2015）

「言語を世代を越えて保持するという仕事は、
親の手を越えたもの」
（O’Bryan他, 1976:176）

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

「日本語教育の推進に関する法律」
疑問点(1)　［第１章第３条の基本理念］

我が国に居住する幼児期及び学齢期にある外国人等の家庭における教育等において使用される言語の重要性に配慮して行わなければならない。

- 「家庭における教育等において使用される言語」とは何か？ どうして母語ではないのか？
- 子どもは学校言語を家に持ち込むことが多いため家庭で使用される言語はさまざま

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

母語はなぜ必要か

(カミンズ, 2015)

- 1言語よりも、2言語の方がプラス
  - バイリンガリズムは、言語の発達上、教育上プラス
  - マイノリティ言語で学習しても学力に損失はない
- 言語間の転移
  - 母語・継承語を伸ばすことによって学校言語も伸びる
  - 母語の熟達度で第二言語の伸びが予測できる
- 個人にプラス
  - 家族との絆・情緒の安定・アイデンティティの確立
  - 母語の否定は、子ども自身の否定
- 国益につながる
  - 国の社会的、経済的、文化的、言語的資源

「日本は母語教育の不在ー日本語指導の補助的役割中心」
（野津, 2010）

母語	習得順序・時期	一番初めに覚えた言語
	到達度	一番理解できる言語
	使用頻度	もっとも頻繁に使う言語
	アイデンティティ（内的）	アイデンティティが持てる言語
	アイデンティティ（外的）	人に母語話者だと思われる言語
継承語 (複数言語環境)	習得順序・時期	一番初めに覚えた言語
	到達度	学校言語のプレシャーでフルに伸びない言語
	使用頻度	家庭中心
	アイデンティティ（内的）	アイデンティティが揺れる
	アイデンティティ（外的）	人に母語話者だと思われて恥ずかしい思いをする言語

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

親の立場から見た家庭内言語ー国内の場合

- 学校で使う日本語の方が自分の母語より大事だと判断しがち
  - 片言でも家で親が日本語を使う方が子どものためになる
  - 日本人の子と同じ行動を取らないと子どもがいじめられる
- 親が、医師の面談など生活上で子どもの日本語力が必要
  - 親子の力関係が逆になる(cultural broker)
  - 子どもが主導権を持つ場合もある
- 親子の会話の質と量の低下
  - 親の母語（例中国語）で話しかけても子どもの答えは日本語になりがち（聴解型バイリンガル）
  - 片言の中国語（子ども）と片言の日本語（親）の両方で会話が成り立つため、複雑な内容の話は避ける
- 家で親とは中国語、弟/妹とは日本語
  - 子どもがバイリンガルに育っていることを親は誇りに思う

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

カナダのオンタリオ州の事例

仏イマージョン教育

- 公用語法（1969)
- 英語と仏語のバランスをとるのに5,000~6,000時間（K-G5)
- 聞く・読むはネーティブ並み
- 効果的なのは早期トータルイマージョン
- 沈黙期が1年半ぐらい
- 母語話者児童生徒との自然な交流がないこと

国際語教育

- 多文化主義法 (1988)
- 「継承語」から「国際語」に変更 (1990)
- マイノリティ言語教育
- 混合クラス
- 指導ストラテジー
  - Differentiated Instruction
  - 教科学習との統合
    例 Financial Literacy
  - Project-based learning
  - マルチリンガル指導法

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

- 「国際語教育」初等部（43言語 423校 3万人　日本語9校 ）
  - 統合クラス
  - 放課後クラス
  - 週末クラス
  - サマースクール
  - ランチタイム、朝授業前

生涯教育課の管轄

- 「国際語教育」高等部（74言語　日本語11校）
  - 統合クラス
  - 放課後・週末クラス

- 継承日本語プログラム（幼～中2）27校
  - 日本語学校 10
  - 日本語幼児教室/プレスクール 10
  - プレイグループ 2、保育園・デイケア 5

- 補習授業校（幼～高3）1校 600人

学校教育の外に
追いやられたまま
放置（カミンズ）

学習言語を高度に伸ばせるのは補習校のみ (中島)

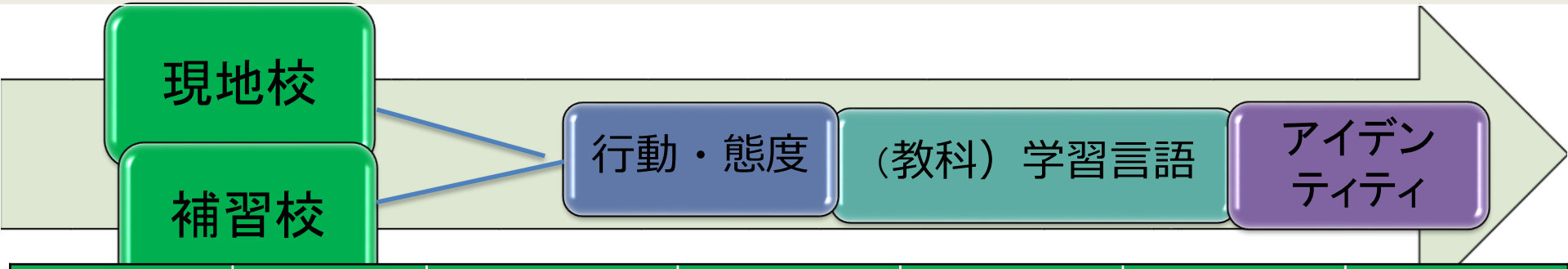
ⓒ Kazuko Nakajima 2019

国際語（高等部）教師の悲鳴

「今年〔1996年〕は10年生と11年生の二つのコースを開催、両方合わせて30数人の生徒でスタートした。10年生のコースを終えて上がってきた高校生のほか、大学生、成人もいるし、日系の子どももいる。正規にはクレジット・コースには入れない年齢の子どももいる。10年生のコースには親子で通ってくる場合もある。…（中略）…噂では「土曜日のクレジット・コースは費用がかかりすぎるので取り止め」になる可能性もあり、高校までの日本語教育をこの地で「絶滅」させないためには正規のコースに格上げをする必要があると考えている。しかしそのためには、日本語を教えられる教員免許を持った先生が必要である。しかし今のところそのような人は見当たらないし、期待もできない状況である。」(高橋1997, p.38)

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

バイリテラル・バイカルチュラル育成（現地校＋補習校）



	月	火	水	木	金	土
高等部	現地校 授業時間年間 800 時間 授業言語は英語１００％ または英語＋仏語 （フレンチイマージョンの場合）					補習校 年間 約４０日 日本語 １００％
中等部						
初等部						
幼稚部						
幼児期	家庭と地域の幼児日本語プログラム					

© Kaoru Nakamura 2019

言語間の関係: 言語能力の三面と相互依存関係

(Cummins, 2000)

- ConversationalFluency
- 会話の流暢度
- 1-2年で習得
- 交流スタイルの転移

- Discrete Language Skills
- 弁別的言語能力
- 対象によって必要な時間が異なる (例:平仮名と漢字)
- 音韻意識や学習ストラテジーの転移

- Academic Language Proficiency
- 教科学習言語能力
- 5–7年必要
- 母語の基礎が弱い場合は10年かかる
- ALP全体に転移が期待できる

© Kazuko Nakajima 2019

環境との関係

地域

学校

母国

日系文化会館

英語？
日本語？

現地校

バイリンガル

塾

補習校

体験入学

祖父母

日本語？

ベビーシッター

家庭

大学は？

ⓒ Kazuko Nakajima 2019
ⓒ Kazuko Nakajima 2019

日･英作文力調査
ートロント補習授業校小中学生ー

(中島2014; 中島・佐野 2015)

- 対象　336名
- 国際家庭（31.7%),国際児G1-5(35%),G6-7(21%),G8-9(10%)

- 担任監督のもと日本語作文,翌週英語作文(40分)
- テーマは「カナダについて」（日英同題）
- 質的評価7項目（4段階評価）と量的分析6項目
- 主成分分析 (PCA) をしてPCAスコアを比較対照に使用

結果

1) 「作文の長さ」「語彙の多様性」「構文の複雑さ」「表記上の誤用」で中度の相関 (r= .47～.57, p<.001 n=249)
2) 共有されていた作文ストラテジー
   時間配分、書字･表記の正確度、段落構成、文章構成（イントロと結語の有無など）など

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

(続）日･英作文調査

- ALPが発達するG6-9 (82名）を取り出して日英作文力の関係を分析
- 短期滞在グループ(2年以内　30名)、中期滞在グループ(3年～7年28名)、長期滞在グループ(現地生まれを含む　22名)に分けて分析

結果

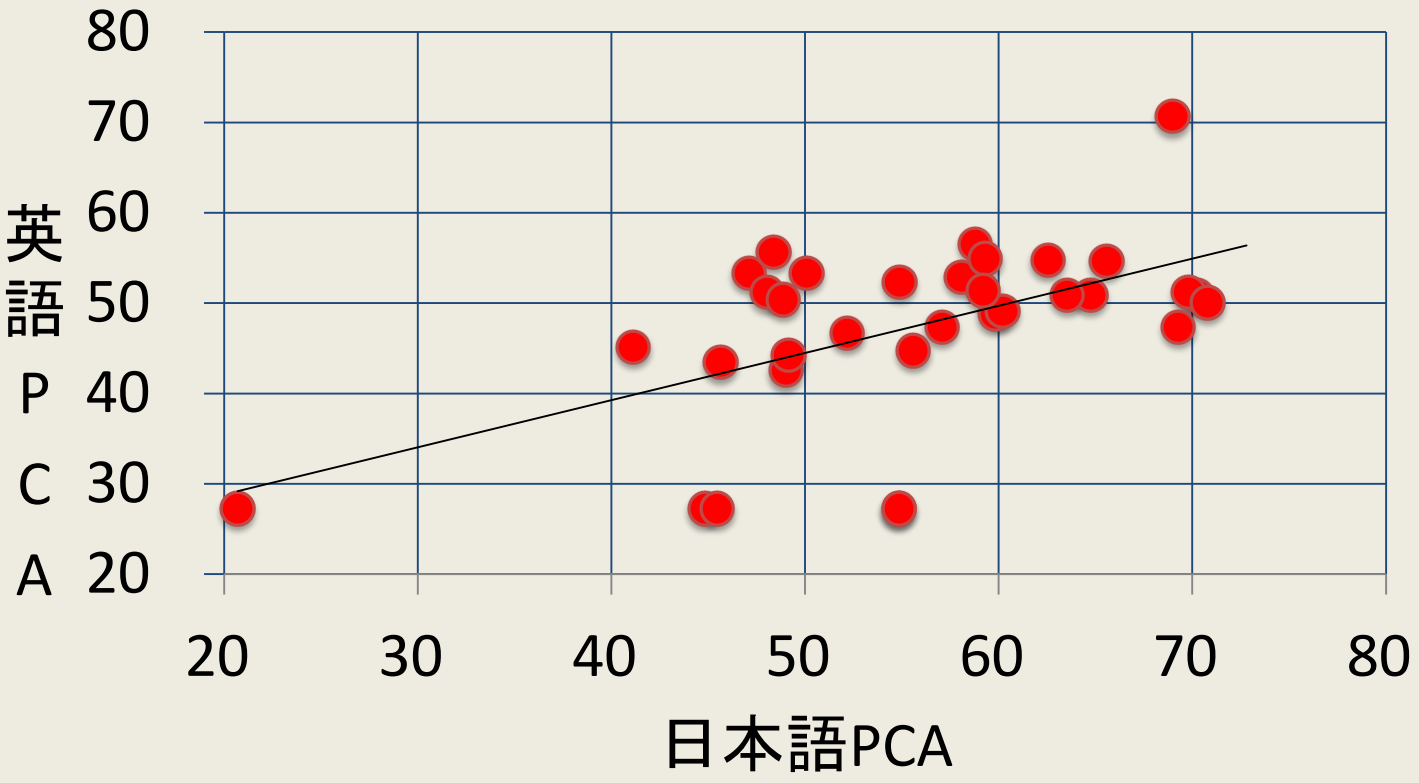
1) 両言語PCA間の相関係数は中度弱の相関　（r = .410, p <.001 n=82）
2) 短期の英語作文力は標準値50周辺に集まる。日本語作文力も半数近くが標準値以下。日･英作文力に高い相関関係が見られた。（r=.650, p<.001 n=30)
3) 中期は２名を除いて全員標準値を越え,両言語とも右肩上に集中。両言語のPCAの差が少なく, 両言語とも作文力が最も高い。
4) 長期は、英語が全員標準値を越えているが,日本語は約半数(52%,12名)が標準以下。２言語の作文力の格差が大きい。

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

G6−G9の短期滞在グループ

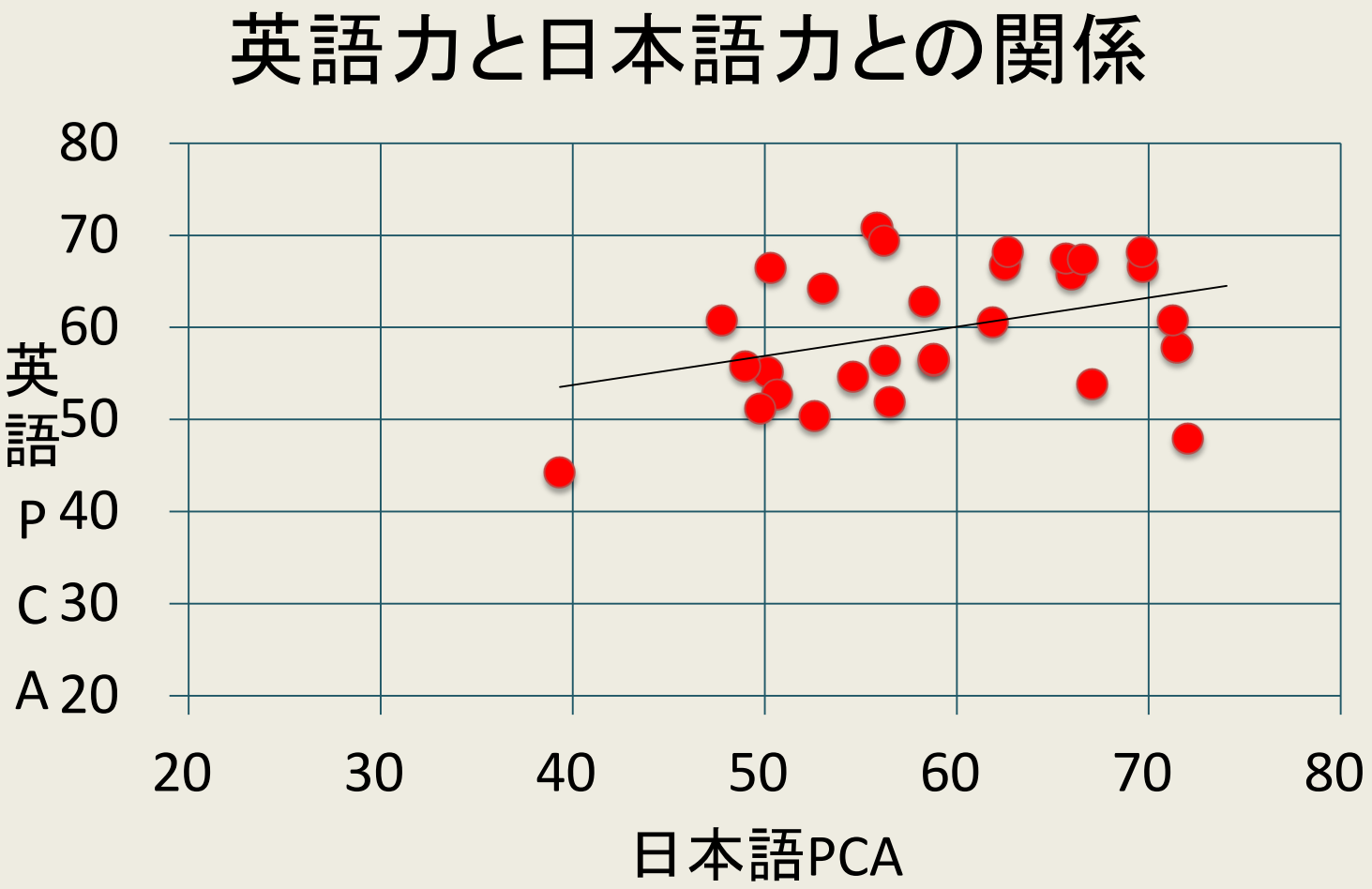
英語作文力と日本語作文力との関係

（有意相関 *r=.650, p<.001 n=30*）



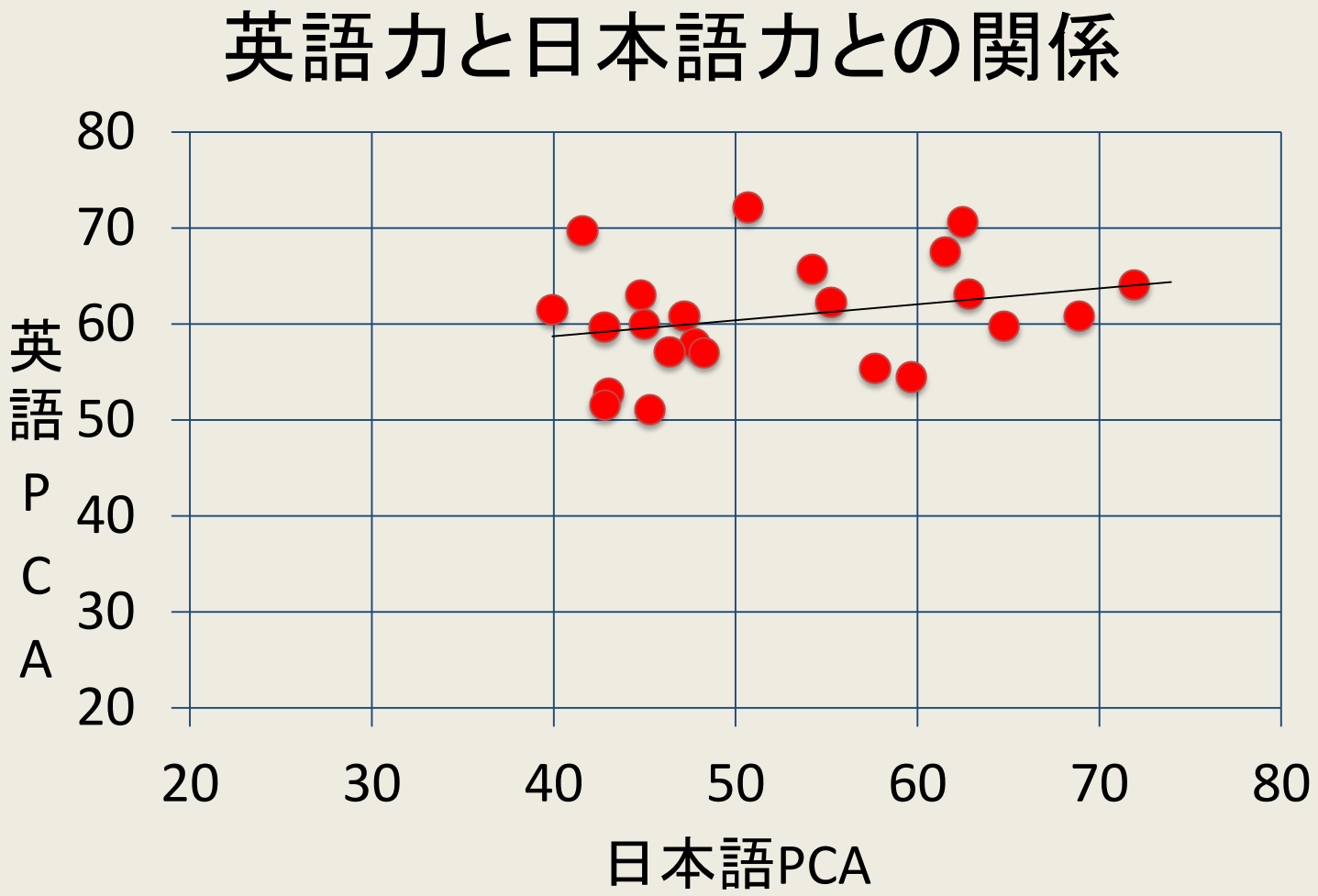
ⓒ Kazuko Nakajima 2019

G6−G9の中期滞在グループ（n=28）



ⓒ Kazuko Nakajima 2019

G6–G9の長期滞在グループ（n＝22）



ⓒ Kazuko Nakajima 2019

補習校卒業生の声 (Li, 2019)

李　多園さん　　トロント大学工学部

- 背景：東京生まれ、10歳で来加、両親中国人、
  母親は日本語に堪能
- 幼児期：　日本語使用の保育園
- 家庭言語：　両親は中国語で話すが、当人は日本語で応答、
  弟とは日本語、来加後、最近は英語が多くなる
- 学習言語：　日本では日本語、カナダでは英語、日本語学習
  を補習校で続ける
- 日本帰国：　不明　大学生になってから日本でインターン
- 補習校：　G5ーG12
- 地域日本人との交流：不明
- アイデンティティ：現在努力中、中国人のアイデンティ
  ティを取り戻そうと努力している

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

バイリンガル子育て

———第 17 回　　企画・解説:　中島和子（トロント大学名誉教授・バイリンガル教育研究）

「バイリンガル・トライリンガルに育つこと——子どもの立場から振り返る」

外国で子育てをする場合、親の母語の子どもへの継承は容易なことではありません。幼い頃は流暢に話せても、学校に入ると現地語の方が大事になり、親が中国語で話しかけても答えは日本語という「聴解型バイリンガル」になりがちです。李多園さんもその例で「自分は日本人」だと思って育ったそうです。高学歴で日本語に堪能な両親は留学生として来日、日本で就職した後カナダに移住。特筆すべきはそのあとで、本人は英語獲得で四苦八苦する一方、補習授業校に８年も通い、高度な日本語力をほぼ自力で獲得したこと、そして継承中国語に対する複雑な思いを踏まえて「自信が持てるアイデンティティ」を求めて「日々精進」していることです。アイデンティティは1点に留まらず、年齢と共に変わるものなので希望を持って精進してください。

執筆者:　李　多園（トロント大学 Faculty of Engineering 1 年）

私の経験

私は、日本で中国人の両親のもとに生まれ、10歳まで東京に住んでいました。地元の保育園と小学校に通い、日本人に囲まれた環境で育った私は、日本を母国と認識し、ごく普通の「外国人の親をもつ日本人」として過ごしました。小学五年生の時に家族とカナダに移住し、補習校に通うことで日本語を維持してきました。カナダに来たばかりの時は一言も話せなかった英語も上達し、今ではほぼ母国語並みに理解し話すことができるようになっています。そんな私は、自分はバイリンガルだ、と確実に言えます。しかし、私の場合、中国にルーツがあるので、バイリンガルであるだけでは不十分です。実際、私の生い立ちを聞いたほとんどの人は、「トライリンガルですごいね」と言います。トライリンガルに程遠い（英語と日本語と中国語4分の一くらい）私は、毎回、居心地が悪くなり、特に接点があまりない人には大抵苦笑いで返してしまいます。（余談ですが、たまにカナダ人はフランス語もペラペラだと思っている人がいて4ヶ国語できるクワドリンガルだと思われますが、その時は本当に何も言えません。）

バイリンガルの失敗作？

日本に住む中国人として日本語と中国語のバイリンガルになれる環境に生まれ育ったにもかかわらず、私は、中国語を上手く身に付けらませんでした。その要因は、私が中国人としてのアイデンティティや誇りを持てなかったことだと思っています。特に幼少期は両親が仕事で忙しく、家以外では中国語を話す機会も少なかったことから、自然と自分は日本人だと思うようになりました。日本の学校教育では、皆が同じであることが強調されていたので、私が、人一倍「違い」に敏感になってしまったところもあります。両親が中国語で話しかけてくれているにも関わらず、自分の中国人としてのルーツに反感を持っていた私は、常に日本語で返答していました。それが習慣となってしまい、今もほとんど親とは中国語で話しません。中国語に対して苦手意識ができてしまい、中国人としての誇りも持てなかった私は、中国語教室に通っても、自分の中国語が周りに比べて劣っていると感じて挫折。ごく一般の日本人として過ごしていきたいという思いが勝り、違和感なども見て見ぬふりをしていました。

カナダに来て

そんな私は、カナダの多文化社会に助けられました。トロントのフィンチに引っ越して来た当初は英語ができなかった私ですが、中国語を理解できたので、日本人だけではなく中国人とも交流をすることができました。更に、様々な出身地や生い立ちを持つ人に囲まれ、自分の境遇はそんなに特別ではないんだと思うことができました。皮肉ですが、当時はみんなと同じであることを認識でき、ほっとしました。その後郊外に引っ越した私は、中国系やインド系カナダ人、アジア人の区別が得意ではない白人など、たくさんの人と出会いました。自分のあるいは親のルーツを大切にする人たちに囲まれる中、私も自分の中国人としてのルーツを前向きに受け入れ始めることができました。しかし、幼少期に一度持ってしまった認識はそう簡単に覆せません。頭ではわかっているのに、とっさに自分のルーツを否定してしまったり、嫌悪感や罪悪感を抱いてしまうことは少なからずあります。これは少しずつ人として成長するしかないと私は考えています。とりあえず今は、中国人のルーツや、出身地である日本、住み慣れたカナダ、そのことに複雑な心境を抱いてしまっていることも含めて、それぞれが現在の自分を作り上げた個性の一部であり、未来の自分を作る可能性であると前向きに思うことにしています。

バイリンガル・トライリンガルになるには

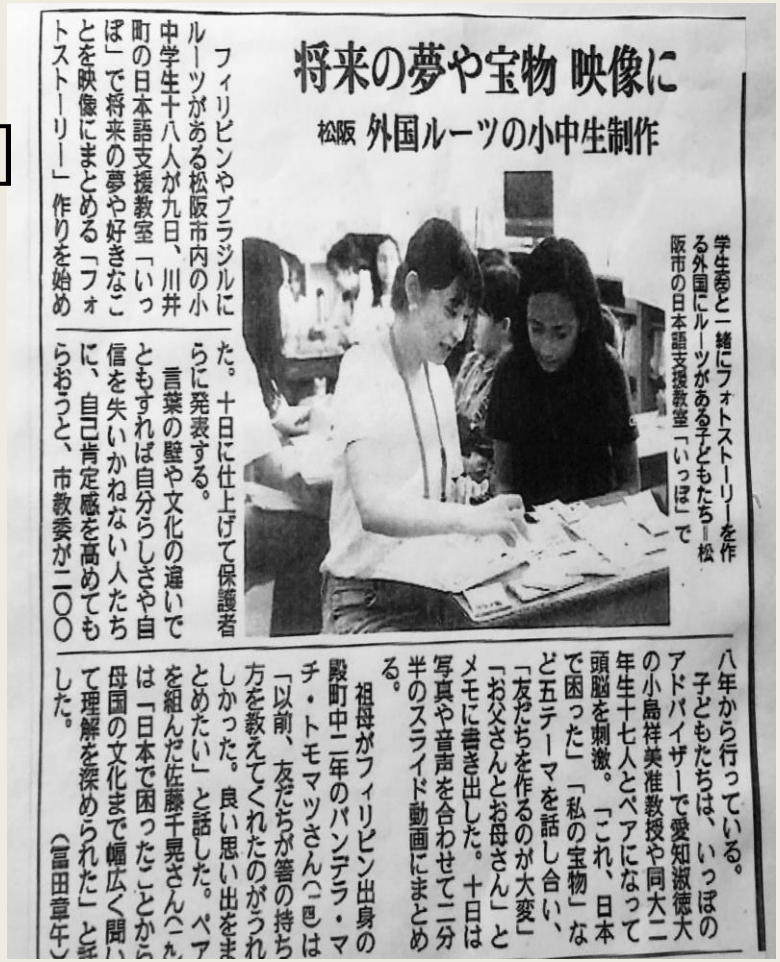
人には個性があり、向き不向きがあり、価値観があります。私の経験がすべての（むしろほとんどの）子どもに当てはまらないと思うし、それは良い面も悪い面もあるかもれしれません。数は少ないですが、私のように日本・祖国・英語圏の国に関わりを持つ人に何人か会ったことがあります。上手く３か国語が話せ、３カ国の文化や習慣にバランスよく関わる人もいれば、祖国よりも日本人であることを重要視した人もいます。どれが良くて悪いのかは周りがどうこう言うことではないと私は思います。大切なのは、自分の価値観と変えられない事実をいかに上手く組み合わせ、自信が持てるアイデンティティを持つことだと思います。４分の１こっちの国、４分の３はこっちの国、と数学的に振り分けても良いし、文化的にはこっちの国だけど言語的にはこっちの国、と分野ごとに分けても良い。自分は〇〇系〇〇人と２つのコミュニティの中間的な一員と名乗るのも良い。それができることによって、意欲的に言語を伸ばそうとしたり、文化に関心を持てるようになったり、自分と似ているが少し違う境遇にいる人たちと真に接することができるようになったりできると思います。

いまの私、これからの私

グローバル化が進むいまは、私にとってとても住みやすい社会です。多様なバックグラウンドを持つ人が通うトロント大学では、個性的かつ協調性のある一員になれつつあると思うし、中国からの留学生とも言語は英語ですが、中国人同士として交流ができていると思います。現在は日本で中小企業のインターンをしていますが、自由度が高い職場で、窮屈に思うこともありません。まだ自分のアイデンティティに百パーセント自信を持てているわけではないのですが、そこは、日々精進です。

マルチリンガル指導アプローチ
(Cummins & Persad, 2014; Cummins, 2019)

- 単語や文字や文型ではなく、教科内容を教える中で、言語を習得する「教科統合型日本語教育」
- マルチリンガル指導アプローチ


将来の夢や宝物 映像に

松阪 外国ルーツの小中生制作

学生ボと一緒にフォトストーリーを作る外国にルーツがある子どもたち＝松阪市の日本語支援教室「いっぽ」で

フィリピンやブラジルにルーツがある松阪市内の小中学生十八人が九日、川井町の日本語支援教室「いっぽ」で将来の夢や好きなことを映像にまとめる「フォトストーリー」作りを始めた。十日に仕上げて保護者らに発表する。

言葉の壁や文化の違いでともすれば自分らしさや自信を失いかねない人たちに、自己肯定感を高めてもらおうと、市教委が二〇〇八年から行っている。

子どもたちは、いっぽのアドバイザーで愛知淑徳大の小島祥美准教授や同大二年生十七人とペアになって頭脳を刺激。「これ、日本で困った」「私の宝物」など五テーマを話し合い、「友だちを作るのが大変」「お父さんとお母さん」とメモに書き出した。十日は写真や音声を合わせて二分半のスライド動画にまとめる。

祖母がフィリピン出身の殿町中二年のパンテラ・マチ・トモマツさん(一四)は「以前、友だちが箸の持ち方を教えてくれたのがうれしかった。良い思い出をまとめたい」と話した。ペアを組んだ佐藤千晃さん(一三)は「日本で困ったことから母国の文化まで幅広く関心を持って理解を深められた」と話した。(富田章午)

右図のような取り組みを

1. 学校の中で行う
2. 複数言語で行う
3. 聴衆の前で発表する
4. ITを使って作品を広める
5. ホーム国の祖父母や親類にも見てもらう
7. 日本人生徒とグループで行う

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

マルチリンガルを育てるための支援

【法的整備】
- 「日本語教育の推進に関する法律」(2019)
- 日本語教育能力判定をして「公認日本語教師」(2020?)
- 2 重国籍による差別 (例JET プログラム,大学奨学金制度)

【財政的支援】
- 校舎借用費援助・教員報酬援助・教材・備品購入援助

【教育的支援】
- カリキュラム・教材・ワークブック等・ IT 関係
- バイリンガル・マルチリンガル教育理論の普及

【間接的支援】
- 認証・表彰等の授与 (例 カナダのPLAR, 米国のSeal of Biliteracy) , 親の努力と貢献を認知すること
- 母子手帳プロジェクト・保護者啓発用パンフレットの作成
- 当事者主導のネットワークづくりへの支援

おわりに

- 年少者と成人との差の認識
- 「日本語モノリンガル」ではなく、「日本語＋継承語」のバイリンガルを育てること
- 母語・継承語を強めて、それを下支えに高校教育に耐える日本語力を育成すること
- 学習支援は幼児から　（小１からでは遅すぎる！）
- 入国年齢と滞在年数を踏まえた調査が必要
- 外国人住民の主体性を生かした間接的支援を！
- 年少者は日本の将来の人的資源であり、言語資源である

ⓒ Kazuko Nakajima 2019

O'Bryan, K.C., Reitz, J.G. & O.M. Kuplowska. 1976. *Non-Official Languages. A Sstudy in Canadian Multiculturalism.* Ottawa: Supply & Services Canada.
Cummins, J. 2000. *Language, Power and Pedagogy-Bilingual Children in the Crossfire*. Multilingual Matters.
カミンズ, J.（印刷中）. (中島和子・高垣俊之訳）「1990年以降のカナダの継承語教育：過去30年の進展」（明石書店）
カミンズ，J. (著）& 中島和子 (訳著） 2011. 「母語はなぜ重要か」『言語マイノリティを支える教育』 慶應大学出版会
柴田武　1956. 「言語形成期というもの」石黒修ほか編『子どもとことば』東京創元社243-266
中島和子　2016. 『バイリンガル教育の方法ー12歳までに親と教師ができること』アルク
中島和子 & 佐野愛子 2016. 「多言語環境に育つ年少者のバイリンガル作文力の分析ープレライティングと文章の構成を中心にー」『日本語教育』 164号 17−32.
野津隆志 2010. 「母語教育の研究動向　“なぜ母語教育は必要か”についての主張や理論の整理」(加筆修正版）科研報告書「外国人児童への母語学習支援体制の構築に関する国際比較研究（基盤研究C：松田陽子代表）
李　多園　2019.10「バイリンガル・トライリンガルに育つことー子どもの立場から振り返る」　第15回　「月刊ふれいざーToronto」April 2019.

ⓒ Kazuko Nakajima 2019